

〔原 著〕

援助観とレジリエンスに及ぼす有償サービス・ラーニングの影響

河野 喬¹・磯邊 省三¹・鶴岡 和幸¹・五百竹亮丞²・石田 博嗣³

Effect of Paid Service-Learning on attitudes of human services and resilience

Takashi KAWANO, Shozo ISOBE, Kazuyuki TSURUOKA,

Ryosuke IOTAKE, and Hiroshi ISHIDA

Abstract

This study identifies the impact of engaging in paid service learning on students who aspire to become interpersonal aid professionals. Ten students engaged in paid service learning were surveyed twice in 2019 and 2020 on ageism, helping effects measures, and resilience. Results showed that there was a significant decrease in ageism scores ($p<.05$) and a significant increase in helping effects in terms of feelings of fulfillment ($p<.01$). In addition, resilience scores showed a significant improvement ($p<.05$) in self-assurance and total scores. The results showed that paid service learning was effective not only for economic benefits, but also as an educational and mental health measure.

Key words:

human services (対人援助), *Community-Based Learning* (地域連携学修), *Service Learning* (サービス・ラーニング), *resilience* (レジリエンス), *practicum education* (実習教育)

1. 序論

世界保健機関 (WHO: World Health Organization) が, 2020年2月11日にCOVID-19 (Novel Coronavirus Disease 2019) と名付けた新型コロナウイルス感染症は, 世界的に猛威を振るい, 多数の感染者及び死者が発生した (WHO, 2020)。この影響は, 健康及び生命に直結するだけでなく, 社会経済活動に多大な影響を及ぼしている。大学生の日常生活においても, 都市圏の大学に対する休止要請やア

ルバイト先の休業等が頻発し, 大学生アルバイトの主な業態である飲食業においては, 5月時点で前年度比マイナス80%を計上する等, 大打撃を被っている (まち・ひと・しごと創生本部, 2020)。このような情勢下で, 廃業を余儀なくされる店舗が続出しており, アルバイト先及び収入源を失った大学生が続出している (全国大学生協連, 2020)。社会環境の急激な変化のなかで, 困難な環境に適応しながら, 逆境を乗り越える教育及び

¹ 広島文化学園大学 (Hiroshima Bunka Gakuen University)

² 広島大学大学院社会科学部マネジメント専攻 博士前期課程

(Graduate School of Social Sciences Department of Management Studies, Hiroshima University)

³ 社会福祉法人恩賜財団済生会 支部広島県済生会 特別養護老人ホームたかね荘

(Special nursing home TAKANESOU, Social Welfare Organization SAISEIKAI Imperial Gift Foundation)

学生支援が大学に問われている。

レジリエンスとは、困難あるいは脅威にさらされながらも、うまく適応する能力、あるいはその過程及び結果を意味する概念である (Masten et al, 1990)。加齢や経験によって誰もが後天的に獲得できる能力とされており (上野他, 2018)、教育、雇用、災害支援等の分野で注目を集めている。広島文化学園大学では、究理実践の建学の精神のもと、保健医療福祉の進路を希望する学生を中心に、有償型のサービス・ラーニング (paid service learning; PSL) を、2015年から現在に至るまで実施してきた。このPSLは、労働条件、学修との両立、就職活動との分離の3点について、社会福祉施設等からの配慮と合意を得て実施している地域基盤型学習 (Mooney et al, 2001; Cress, 2013) の一形態であり、この学修経験によってクライアントへのイメージ、高齢者理解、就職意向について好影響をもたらしたことが示されている (河野 他, 2019)。本研究では、経年による実務経験の蓄積が、PSL学生の援助観及びレジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを目的として調査を行った。

2. 方法

(1) 対象者

社会情報学部健康福祉学科、及び人間健康学部スポーツ健康福祉学科のPSL学生のうち、高齢者施設で1年以上従事する10名 (男性: 3名, 女性: 7名, 平均: 20.9歳 \pm 0.9歳) を調査対象とした。

(2) 調査項目

1) 労働環境

学生にとって適切な就労経験につながり、学業との両立が成立しているかを確認するため、時給、月当たりのアルバイト代、出勤日数、継続月数、及び継続の意志について調査した。

2) エイジズム

エイジズムとは、高齢であることを理由とする系統的なステレオタイプ化と差別の過程を意味し

(Maddox, 1995)、否定的イメージを指す概念である。継続的な高齢者との関わりが、援助観及びエイジズムにどのような影響を及ぼすのかを確認するため、日本語版Fraboniエイジズム尺度短縮版 (以下、FSA) (原田他, 2004) を用いた。FSAは、全14項目からなるエイジズムを図るための尺度である。下位項目「嫌悪・差別」(6項目)、「回避」(5項目)、「誹謗」(3項目)に分類することができる。回答は、「そう思う」= 5点、「まあそう思う」= 4点、「どちらともいえない」= 3点、「あまりそう思わない」= 2点、「そう思わない」= 1点、の5件法で求め、Q.12のみ逆転項目として扱った。得点が高いほどエイジズム傾向が高い、すなわち高齢者への否定的態度が強いと解することができる (得点範囲: 14 ~ 70点)。

3) 援助成果

援助成果とは、向社会的行動において、他者との相互作用を通して、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬と定義された概念である (妹尾, 2001)。妹尾ら (2003) は、長期にわたる援助活動から得られる成果の測定と、継続的な援助活動を動機づける要因を探る目的で援助成果測定尺度を開発している。このスケールは、「愛他的精神の高揚」、「人間関係の広がり」、「人生への意欲喚起」の3つの下位尺度で構成され、11項目に回答を求めるものである。本研究では、継続的な高齢者との関わりが、学生の援助成果ないし援助観に及ぼす影響を確認するため、1年間の変化を5件法で評定させた (「全くあてはまらない」= 1点、「あまりあてはまらない」= 2点、「どちらともいえない」= 3点、「少しあてはまる」= 4点、「非常にあてはまる」= 5点)。なお、援助成果得点は、高くなるほど援助成果が得られていることを表すように算出している。

4) レジリエンス

対人援助におけるレジリエンスを評価するため、周囲の人からの支援や協力度合いの感じ方、自己の問題解決の程度、協調性の程度などから検

討されたS-H 式レジリエンス検査（祐宗，2007）のパート1を用いた。パート1は、現在の状態について測定する項目であり、「対人関係・ソーシャルサポート」，「自己効力感」，及び「社会性」の3因子，合計27項目で構成されている。「全くそうである」＝5点，「ややそうである」＝4点，「どちらともいえない」＝3点，「そうではない」＝2点，「全くそうではない」＝1点，の5件法で評価した。得点が高いほどレジリエンスが高いことを示す。なお，使用にあたっては，販売ライセンスを有する竹井機器工業株式会社から質問紙を購入した。

（3）倫理的配慮

本研究は，広島文化学園大学人間健康学部研究倫理指針，及び日本社会福祉学会研究倫理規程に則って計画し，人間健康学部研究倫理委員会の承認を得て行った（承認番号：HS-2020004）。実施にあたって，PSL学生に口頭及び書面で，研究の目的，方法，協力の任意性，及びいつでも協力を中止できる旨を説明し，協力の意向を示した学生にのみ質問紙調査を実施した。

（4）統計的处理

各尺度得点は，先行研究に基づきスコアリングを行い，平均値及び標準偏差を求めた。FSA得点，援助成果得点，及びレジリエンス得点は，PSL学生の2019年度（PRE）と2020年度（POST）についてpaired *t*-testを行った。有意水準はそれぞれ5%未満とし，解析には無償の統計解析プログラムHAD version16.20（清水，2016）及びSPSS version 24.0を使用した。

3. 結果

（1）対象者の概要

PSL学生の概要をTable 1に示す。平均従事期間は23カ月であり，出勤日数は週平均3日であった。収入は，時給平均900円，月額31,000円であった。継続の意志については，10名全員が「続けた

Table 1 対象者の概要

項目	実務経験学生 (N=10)	
性別		
男性	3	30%
女性	7	70%
時給 (円)	900	±0.0
平均従事期間 (月)	23	±13.3
一カ月当たりのアルバイト代	31,000	±12867.0
一週間当たりの出勤日数	3	±0.7
継続の意思		
続けたい	10	100%
場所を変えて続けたい	0	0%
辞めたい	0	0%

Number ± SD, %.

い」を選択した。

（2）エイジズム

PSL学生のFSA得点（PRE, POST）をTable 2に示す。下位項目のうち「嫌悪差別 ($p<.05$)，「回避」($p<.05$) が，有意に軽減した。

（3）援助成果

PSL学生の援助成果測定尺度スコア（PRE, POST）をTable 2に示す。下位項目「人生への意欲喚起」に含まれる「気持ちの充実感が生まれた」が，有意に改善した ($p<.01$)。

（4）レジリエンス

PSL学生のレジリエンス得点（PRE, POST）をTable 3に示す。B因子「自己効力感」($p<.05$)，及び総得点 ($p<.05$) が有意に上昇した。

4. 考察

本研究は，PSLによる実務経験の蓄積が，PSL学生の援助観及びレジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを通して，PSLの教育効果を検証する目的で行われた。その結果，エイジズムの軽減，援助成果の改善，レジリエンスの向上が認められた。これは，PSLが学生にとって多角的に有

Table 2 エイジズム得点の比較

下位項目	質問項目	2019 (PRE)	2020 (POST)
嫌悪差別	Q.4. 高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう	1.70 ± 0.82	1.13 ± 0.35
	Q.5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	1.50 ± 0.85	1.00 ± 0.00
	Q.6. 高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時には感謝すべきだ	2.30 ± 1.06	1.75 ± 1.17
	Q.9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	1.50 ± 0.53	1.00 ± 0.00 *
	Q.10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	1.80 ± 0.63	1.63 ± 1.06
	Q.11. 高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	1.40 ± 0.52	1.00 ± 0.00 *
回避	Q.7. もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	1.50 ± 0.53	1.00 ± 0.00 *
	Q.8. 個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	1.50 ± 0.53	1.00 ± 0.00 *
	Q.12. a) 高齢者との付き合いは、結構楽しい	1.40 ± 0.52	1.25 ± 0.46
	Q.13. できれば、高齢者と一緒に住みたくない	1.80 ± 0.79	1.38 ± 0.74
誹謗	Q.14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	1.60 ± 0.70	1.38 ± 0.74
	Q.1. 多くの高齢者は、けちでお金や物を貯めている	1.90 ± 0.74	1.75 ± 0.71
	Q.2. 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人づくりに興味がない	1.70 ± 0.48	1.63 ± 0.52
	Q.3. 多くの高齢者は、過去に生きている	2.50 ± 0.97	2.50 ± 1.41

Mean ± SD, *: $p < .05$.

Table 3 援助効果測定値の比較

下位項目	質問項目	2019 (PRE)	2020 (POST)
愛他的精神 の高揚 (range, 4-20)	Q.1. 人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	4.50 ± 0.71	4.40 ± 0.52
	Q.2. 日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変った	4.30 ± 0.48	4.30 ± 0.48
	Q.3. 自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた	4.30 ± 0.48	4.20 ± 0.63
	Q.4. 対象者の幸福・安寧のために新たな目標ができた	4.10 ± 0.99	4.00 ± 0.67
人間関係 の広がり (range, 4-20)	Q.5. 活動そのものが楽しめた	4.30 ± 1.06	4.60 ± 0.52
	Q.6. 仲の良い友達ができ	4.30 ± 0.95	4.30 ± 0.68
	Q.7. 新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	4.50 ± 0.53	4.40 ± 0.52
	Q.8. 対象者や他の職員から様々なことを教えられ勉強になっている	4.70 ± 0.48	4.80 ± 0.42
人生への 意欲喚起 (range, 3-15)	Q.9. 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	4.10 ± 0.57	4.00 ± 0.82
	Q.10. 気持ちの充実感が生まれた	3.60 ± 0.70	4.50 ± 0.53 **
	Q.11. やりがいが生まれた	4.30 ± 0.68	4.50 ± 0.71

Mean ± SD, **: $p < .01$.

Table 4 レジリエンス得点の比較

因子	2019 (PRE)	2020 (POST)
A因子：ソーシャルサポート (range, 12-60)	50.38 ± 4.41	54.25 ± 5.31
B因子：自己効力感 (range, 10-50)	36.25 ± 4.10	42.13 ± 4.09 *
C因子：社会性 (range, 5-25)	19.88 ± 2.90	21.50 ± 3.67
Total (range, 27-135)	106.50 ± 7.07	117.88 ± 8.87 *

Mean ± SD, *: $p < .05$.

益であり、持続性が期待されうるものであることを示している。

エイジズムの克服は、クライアントの脆弱性だけでなく、強み、主体性、及び潜在可能性といった肯定的側面へ着目する姿勢が育まれていることを示唆する。これは、社会福祉専門職として不可欠なストレングス (Rapp, 1998) 及びエンパワメント (Solomon, 1976) を重視した支援を可能と

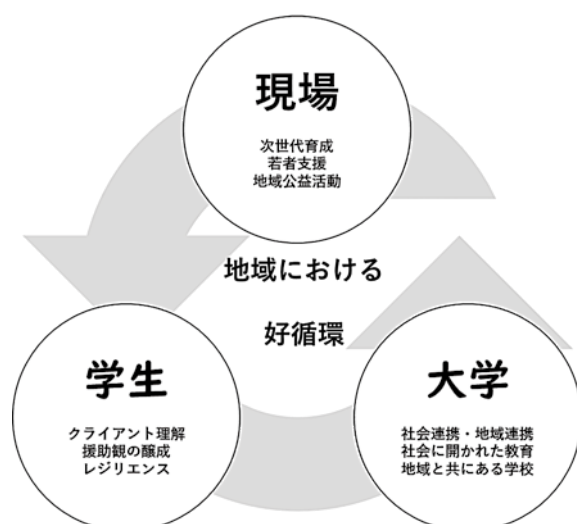


Figure 1 有償サービス・ラーニングの循環図

するものであり、学部教育目的と一致する望ましい変容である。

援助成果の自覚及び志向性の向上は、援助・非

援助行動の好循環をもたらし、他者だけでなく自己に及ぶ援助の成果を一層ポジティブに受け止められるように作用する(妹尾他, 2011)。このことは、相手を支えるというだけでなく、支えられることをも肯定的に捉え、社会に対する信頼や多職種連携における積極性につながる変容であるものと考えられる。

そして、レジリエンスの上昇は、アイデンティティに寄与し、自分が社会に受け入れられる存在であるという自信の高まり、新奇性追求、感情調整といった肯定的な変容との関連が指摘されている(柴田, 2020)。また、キャリア形成との関係においては、状況の変化に適応できる、困ってもふさぎ込まず次の手を考えられる、困難なことでも前向きに取り組むことができる、といった現代社会を生き抜くうえで重要な力量についても向上させることが示されている(池田他, 2019)。

但し、PSLは、学生のためのために発案されたものではない。現在、学校教育の場は、学内だけに留まらず「社会に開かれた教育」、「地域と共にある学校」であることが求められている(文部科学省中央教育審議会, 2017)。また、社会福祉法人をはじめとする公益法人には、地域における公益的な取組が努力義務として課されている(社会福祉法第24条第2項)。PSLは、学生を中心に置きつつも「三方善し」につながる大学と社会福祉法人の新しい連携協働の形であるものと考えられる(Figure 1)。

しかし、本研究には、特にFSA評価にフロア効果がみられること、PSLの分野(高齢分野、児童分野、障害分野等)及び事業規模(大型施設、単独事業所等)毎の検討が行われていないという限界がある。今後は、実習教育との類似性や峻別の立場から、実践教育としての保健医療福祉専門職のコンピテンシー評価(小原, 2010)や、キャリアレジリエンス(池田他, 2019)といった観点からの評価を行うことが有用であると考えられる。

5. 結論

本研究の結果、PSLに従事している学生のエイジズム、援助成果、及びレジリエンスが有意に向上していることが認められた。PSLの実施が、学生の経済的利益だけでなく、教育及びメンタルヘルス対策としても有効であることが示された。

謝辞

ご協力いただいている施設・事業所の皆様には、COVID-19拡大防止の状況下にもかかわらず、これまでと変わらず学生に貴重な学びと経験を与えていただいておりますこと、心より深く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) Cress, C. M. (2013). "What are Service-Learning and Civic Engagement?". Cress et. al. Learning through Servicing: A Student Guidebook for Service-Learning and Civic Engagement across Academic Disciplines and Cultural Communities. Sterling, Virginia: Stylus Publishing.
- 2) 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子 (2004). 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成; 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定. 老年社会科学, 26(3), 308-319.
- 3) 平尾元彦 (2019). インターンシップとアルバイトの教育効果. 大学教育, (16), 25-36.
- 4) 池田めぐみ, 伏木田稚子, 山内祐平 (2019). 大学生の準正課活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響. 日本教育工学会論文誌, 43(1), 1-11.
- 5) 河野喬, 磯邊省三, 鶴岡和幸, 石田博嗣 (2019). 学生の対人援助観に及ぼす有償Service Learningの効果: 社会福祉施設と大学の連携によるCommunity-Based Learning. 人間健康学研究, (2), 61-70.
- 6) まち・ひと・しごと創生本部 (2020).

- V-RESAS. URL: <https://v-resas.go.jp/#food-services> (2020.10.30確認)
- 7) Maddox, G. L. (1995). *The encyclopedia of aging: a comprehensive resource in gerontology and geriatrics* 2nd ed. Springer. エイジング大事典刊行委員会 (1997). *エイジング大辞典* [新装版]. 早稲田大学出版社.
- 8) Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Dev. Psychopathol.*, 2(4), 425-444.
- 9) 文部科学省中央教育審議会 (2017). 新しい学習指導要領の考え方: 中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ. URL: https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf (2020.10.30確認)
- 10) Mooney, L. A., & Edwards, B. (2001). Experiential learning in sociology: Service learning and other community-based learning initiatives. *Teach. Sociol.*, 181-194.
- 11) 小原真知子 (2010). 保健医療分野におけるソーシャルワーク専門性と職務満足度の関連性について. *社会福祉* (日本女子大学社会福祉学会), 51, 19-39.
- 12) Rapp, CA. (1998). *The strengths model: Case management with people suffering from severe and persistent mental illness*. New York: Oxford University Press.
- 13) 関口倫紀 (2010). 大学生のアルバイト経験とキャリア形成. *日本労働研究雑誌*, 52(9), 67-85.
- 14) 妹尾香織, 高木修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果. *社会心理学研究*, 18 (2), 106-118.
- 15) 妹尾香織, 高木修 (2011). 援助・被援助行動の好循環を規定する要因—援助成果志向性が果たす機能の検討. *関西大学社会学部紀要*, 42(2), 117-130.
- 16) 柴田康順 (2020). 大学生におけるアイデンティティとレジリエンスの概念的関連性——アイデンティティの問題に対して有効な心理的援助の検討. *パーソナリティ研究*, 29(1), 34-45.
- 17) 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1.
- 18) Solomon, BB. (1976). *Black empowerment: Social work in oppressed communities*. Columbia University Press.
- 19) 祐宗省三 (2007). *SH 式レジリエンス検査*. 竹井機器工業株式会社.
- 20) 上野雄己, 平野真理, 小塩真司 (2018). 日本人成人におけるレジリエンスと年齢の関連. *心理学研究*, 89(5): 514-519.
- 21) WHO: World Health Organization (2020) Timeline: WHO's COVID-19 response. URL: <https://www.who.int/emergencies/diseases/novel-coronavirus-2019/interactive-timeline> (2020.10.30確認)
- 22) 全国大学生協連 (2020). 新型コロナウイルス対策特設サイト # with コロナ, URL: <https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/index.html> (2020.10.30確認)